ワーズワスのメタ・ポエム
—「山査子」の一解釈—

伊　里　松　俊

ワーズワスの詩「山査子」(“The Thorn”) は不可解な詩である。読者は、詩の中の、主人公マーサ・レイ (Martha Ray) の悲しい叫び声を強く印象付けられるのみで、読後、詩が描く物語や事件に関しては、語り手と同様、確たる知識を持たず、一種空虚な心のまま、取り残されるだけである。

ある批評家は読者が詩「山査子」に伝統バラッドの「語り」を求めるのは見当違いで、この詩は「情熱」という「感覚」を描くという新しいタイプの詩であると解釈した。また、ある主張は、この詩が当時フランス軍がウェールズに上陸するという国家的危機の下に書かれたことに注目し、罪を犯した母親のおかれた社会に関する、詩人の考古学的な歴史探究の試みであると解釈している。さらにはこの詩を観念論と経験論という、認識論的立場から解釈する見解もある。この小論においては、これらとは全く異なるパースペクティヴを与えることを試みることにする。

実際、ワーズワスは彼の詩が読者にどのように理解されるか、多少、不安に思ったようにもみえる。かれは、1798年の初版には詩の語り手の元船乗りを「おしゃべりな語り手」(“loquacious narrator”) と呼ぶのみならず、1800年の第二版では、八十余行に及ぶ、「注」(“Note”) をつけることになったのである。彼はこの「注」の中で、このような語り手を選んだ理由は、迷信が心に作用を及ぼす一般的な法則を表現するという意図があり、迷信深い人物は頭脳の働きは鈍くはないが、動かし難く、殆どいつも「緩慢な頭脳の動きと深い感情」(“slow faculties and deep feelings”) を持つからだという。このような人物はある程度の「想像力」(“imagination”) を持つが、「空想」(“fancy”) に関しては、全く

欠けているという。詩人は、「想像力」を「単純な要素から印象的な効果を生み出す能力」("the faculty which produces impressive effects out of simple elements") と、また、「空想」を「突然の状況変化の多様性や蓄積された心象を受けて、快楽や驚きが興奮させられる力」("the power by which pleasure and surprise are excited by sudden varieties of situation and by accumulated imagery") と定義している。

ワーズワスは、「山査子」の中で、二つのことを実現しようと願ったと言っている。つまり、(1)そのような迷信深い人物が同じ考えに固執しようとする方法を示すこと、(2)彼らの会話が影響を受ける情熱の変化を描くこと、である。彼は語り手の一種頑迷で、素朴ともいえる心の動きを「叙情的で早い律動」("lyrical and rapid metre")の助けを得て描こうとしたのである。(Mason, 37-38)

ワーズワスの『叙情民謡詩集』は、一八世紀のアレグザンダー・ポープ (Alexzander Pope) の影響を強く受けた所謂新古典主義文学の伝統と一線を画すべき、新しい詩歌の世界を開示することを意図したものであった。彼は、従来慣れ親しんだ詩の使い古された言葉から読者を解放し、「もっと純粋で、もっと不変で、もっと精妙な性格の、他の喜び」("other enjoyment, of a purer, more lasting, and more exquisite nature") を与える、全く異なる詩を求めたと主張した。その詩は人間への普遍的興味と倫理的な関係の多様さ及びその質を表現する、新しい詩であるという。

詩人はこの考えを「序文」の冒頭とその結語において繰り返し述べ、強調しているが、まずわれわれはこの二つの目的が詩集『叙情民謡集』の基本理念であるという大前提を十分理解する必要がある。そして、彼が求めた詩の言語は、古典主義のデコーラムにとっぷり漬かった、陳腐な詩的言語ではなく、「生き生きとした感覚の状態にある人の実際の言語」("the real language of men in a state of vivid sensation") であった。

詩集への有名な「序文」に従えば、詩集での詩人の目的は主に四つからなると主張される。それらは、興奮した状態での諸観念を連想する様式に関して、(1)日常生活から出来事や状況を選ぶこと、(2)人間によって実際使われている言語で描写すること、(3)日常事がいつもと変わった姿で表現されるよう、想像力の色付けをすること、(4)人間性の第一法則を跡付けることで、出来事や状況を面白くさせること、である。

また、詩人はこれらの目的を達成するために、田園生活を題材として選んだという。なぜなら、田園生活という状況では、(1)都会と比べ、抑圧が少なく、本質的情感はより平明で、力強い言語で表され、(2)もっと単純な生活のため、基本的感情が一層正確に抱かれ、より力強く伝達されるからである、また、(3)田園生活の様式はこれら本質的な感情や田舎の職業の特質から発生するため、理解するに容易で、永続性のあるものである、(4)この状況下では、人間の感情は自然の美しく恒久的な姿と合体する、という理由によるからである。

The principal object, then, which I proposed to myself in these Poems was to choose incidents and situations from common life, and to relate or describe them throughout, as far as was possible, in a selection of language really used by men; and, at the same time, to throw over them a certain colouring of imagination, whereby ordinary things should be presented to the mind in an unusual way; and further, and above all, to make these incidents and situations interesting by tracing in them, truly though not ostentatiously, the primary laws of our nature—chiefly, as far as regards the manner in which we associate ideas in a state of excitement. Low and rustic life was generally chosen, because in that condition the essential passions of the heart find a better soil in which they can attain their maturity, are less under restraint, and speak a plainer and more emphatic language; because in that condition of life our elementary feelings co-exist in a state of greater simplicity and, consequently, may be more accurately contemplated, and

more forcibly communicated; because the manners of rural life germinate from those elementary feelings and, from the necessary character of rural occupations, are more easily comprehended, and are more durable; and lastly, because in that condition the passions of men are incorporated with the beautiful and permanent forms of nature. The language, too, of these men is adopted (purified indeed from what appear to be its real defects, from all lasting and rational causes of dislike or disgust) because such men hourly communicate with the best objects from which the best part of language is originally derived; and because, from their rank in society and the sameness and narrow circle of their intercourse, being less under the influence of social vanity they convey their feelings and notions in simple and unelaborated expressions. Accordingly, such a language, arising out of repeated experience and regular feelings, is a more permanent, and a far more philosophical language, than that which is frequently substituted for it by Poets, who think that they are conferring honour upon themselves and their art, in proportion as they separate themselves from the sympathies of men, and indulge in arbitrary and capricious habits of expression, in order to furnish food for fickle tastes, and fickle appetites, of their own creation. (Mason, 59-61)

ところで、私がこれらの詩で自分に提案した第一の目的は平凡な生活から出来事や状況を選ぶこと、また可能な限り、人により実際に使用される言語から選んで、それらを物語り、描写すること、それと同時に非日常の方法で、平凡なことが頭に浮かぶようにするある種の想像力の色付けをそれらの上に投影すること、またさらに、主にわれわれが興奮状態において観念を連想づける方法に関して、これ見よがしではないが、偽りなく、とりわけわれわれの本姓の根本原理を出来事や状況の中に跡付けることにより、それらを面白くさせることである。概して下層の田園生活が選択されている。なぜならば、そのような状態において、人の心の本質的感情の高揚は、成熟達成を可能にするより良き土壌を見出すのであり、ストレスが

少ないため、もっと明瞭で勢いのある言葉を話すからである。そのような生活状況では、われわれの基本的感情はもっと大きな単純な状態の中で共存しており、またその結果さらに正確に熟考され、一層強く伝達されるだろうからである。田舎生活の風習はこれらの基本的な感情から、また田舎の仕事の必然的な特性から発生するものであり、もっと容易に理解され、もっと永続性を持つからである。また最後に、そのような状況では、人間の高揚した感情は自然の美しく、不変の姿と合体しているからである。言語も、これらの人の言葉から、(それが持つ現実の欠点と見えるもの、反感あるいは嫌悪という永続的で理性的な理由から、実際には純化されて) 借用されている。というのは、そのような人たちは、言語の最上部分が元々由来する最上の物事と頻繁に通じ合うからである。また、社会における彼らの地位と彼らの付き合い範囲が同一であることや狭いことが原因で、社会的虚栄の影響を受けることも少なく、彼らは単純で手の込んでいない表現で自分の気持や考えを伝えるからである。従って、繰り返される経験やお決まりの感情から発生したそのような言葉は、詩人たちがそれのためにしばしば代用するものと比べ、もっと永続的で、遥かに哲学的な言語となるのである。詩人たちというのは、変わり易い趣味や変わり易い嗜好に糧を供するために、彼らが人間の同情から自分を引き離し、自分独自の創造の恣意的で気紛れな表現の習慣に耽るのに比例して、自分たちが自らとその芸術に栄誉を授けていると考えているからである。

このような詩集「序文」における詩人の狙いと、「山査子」に添えられた「注」を理解した上で、詩「山査子」に議論を向けるとどうなるであろうか。第一連における、二歳児の背丈ほどの、(多分枯死している)「山査子の木」、それにまとわり付く苔。この「山査子の木」をめぐる風景の描写は第六連まで続く。風が強く吹く禿山の尾根道から外れて五ヤードの所、「山査子の木」が立つ、その場所から更に三ヤードの所には、小さな泥の池がある。また、年老いた「山査子の木」に寄り添うようにして、「一つの美しい塚、一つの苔の山」("A beauteous heap, a Hill of moss") が見られる。苔は辺りに広がり、美しい敷物

のように見え、さらに成長して、「山査子の木」をも地面に引きずり下ろそうと試みているように見える。

I

THERE is a Thorn — it looks so old,
In truth, you'd find it hard to say
How it could ever have been young —
It looks so old and grey.
Not higher than a two years' child
It stands erect, this aged Thorn;
No leaves it has, no thorny points;
It is a mass of knotted joints,
A wretched thing forlorn.
It stands erect, and like a stone
With lichens it is overgrown.

II

Like rock or stone, it is o'ergrown
With lichens to the very top,
And hung with heavy tufts of moss,
A melancholy crop:
Up from the earth these mosses creep,
And this poor Thorn they clasp it round
So close, you'd say that they are bent
With plain and manifest intent
To drag it to the ground;
And all had joined in one endeavour
To bury this poor Thorn for ever.

III

High on a mountain's highest ridge,
Where oft the stormy winter gale

Cuts like a scythe, while through the clouds
It sweeps from vale to vale,
Not five yards from the mountain path,
This Thorn you on your left espy;
And to the left, three yards beyond,
You see a little muddy Pond
Of water never dry;
I've measured it from side to side:
'Tis three feet long, and two feet wide.

Ⅳ

And, close beside this aged Thorn,
There is a fresh and lovely sight,
A beauteous heap, a Hill of moss,
Just half a foot in height.
All lovely colours there you see,
All colours that were ever seen;
And mossy net-work too is there,
As if by hand of lady fair
The work had woven been;
And cups, the darlings of the eye,
So deep is their vermilion dye.

Ⅴ

Ah me! what lovely tints are there!
Of olive green and scarlet bright,
In spikes, in branches, and in stars,
Green, red, and pearly white.
This heap of earth o'ergrown with moss,
Which close beside the Thorn you see,
So fresh in all its beauteous dyes,

Is like an infant's grave in size,
As like as like can be:
But never, never any where,
An infant's grave was half so fair.

VI

Now would you see this aged Thorn,
This Pond, and beauteous hill of moss,
You must take care and choose your time
The mountain when to cross.
For oft there sits, between the Heap
That's like an infant's grave in size,
And that same Pond of which I spoke,
A Woman in a scarlet cloak,
And to herself she cries,
'Oh misery! oh misery!
Oh woe is me! oh misery!'

I

一本の山査子があります。それは随分な古木で、
実際に、随分古く、一体若い時期が
ありえたとは言うのが困難なほど、
それほど古く、灰色に見えるのです。
それは二歳児の背丈より低い背で、真直ぐ
立っているのです、年老いた山査子は。
木の葉は一枚も付けず、痛い棘もありません。
それは瘤だらけの節の塊で、
一つの哀れで侘びしい存在です。
それは真直ぐ立ち、また、石のように、
苔に覆われているのです。

II

それは、岩や石のように、
一番天辺まで苔に覆われていて、
さらには、苔の房がぶら下がっていて、
一つの憂鬱な露頭になっているのです。
地面からこれらの苔は這い上がり、この哀れな
山査子の回りにぴったり絡みついているので、
明確ではっきりした意図を持って、
その木を地面へと引きずり下ろすよう
専心していると、あなたは言われるでしょう。
つまり、全部の苔が哀れな山査子を永遠に葬るという
一つの努力に力を合わせてきたのです。

Ⅲ

ある山の一番高い尾根のそのまた高い所、
そこではよく嵐模様の冬の強風が大鎌のように
身を切り、それと同時に、雲の中を、
谷から谷へとさっと通り抜けて行く所ですが、
山の道から五ヤードと離れていない所の左側に、
あなたはこの山査子を見つけるのです。
さらに左手三ヤード向こうに、
決して涸れない小さな
泥の水溜を見るのです。
私はそれを端から端に測ってみましたが、
長さ三フィート、幅が二フィートありました。

Ⅳ

それから、この年老いた山査子のすくそばに、
瑞々しく、美しい光景、高さはわずか半フィートの、
一つの美しい塊、一つの苔の山があるのです。
その場には、目が知っている全ての色、
全ての美しい色があなたには見えるのです。

それからそこには、あたかもその作品が
美しいご婦人の手で織られたかのような、
苔の編み細工もあるのです。
それから、朱色の染め色のたいそう深い、
人の目にはお気に入りの、杯型の花があります。

V

ああ、なんと美しい、オリーヴの緑、
鮮やかな緋の色があることでしょう。
穂の形や、枝状や星型になった、
緑、赤、それから真珠のような白。
山査子の木の直ぐそばに見える、
苔に覆われた、この大地の塊は、
様々な美しい色に染められて、非常に瑞々しく、
墓以外ではありえないほど
大きさは幼子の墓と似ているのです。
しかし、全く、全く何処へ行っても、
幼子の墓はその半分も美しくないのです。

VI

さて、あなたがこの老いた山査子と、
この水溜と美しい苔の山を見たいのなら、
注意をして、山を横切る時の
時間を選ばなければなりません。
というのは、そこにはよく、
大きさがそんなにも幼子の墓に似ている塊と、
それから私がお話したあの同じ水溜の間には、
緋色の外套を着た一人の女が座っていて、
一人だけで、「ああ悲しい、ああ悲しい、
ああ辛い、ああ悲しい」、
と泣いているからです。

この「山査子の木」の立つ場所に、不思議なことであるが、緋色のマントを着た女、マーサ・レイが天候の如何に拘らず、昼夜訪れ、「ああ、悲しい」（'Oh misery'）と号泣しているのである。村人の噂では、彼女はスティーヴン・ヒル（Stephen Hill）なる男に捨てられ、子供を生み、悲嘆に暮れているのだという。巷では、子供は生まれたのか、生まれなかったのか、生きて生まれたか、死産であったか、様々な憶測がなされた。村人の中には彼女の嬰児殺しを確信し、死体の骨を確認するため、「苔の塚」の下を掘ってみるべきだと主張する者もいた。また実際その場所を掘ろうとした時、周囲五十ヤードにわたり草が揺れる超自然的現象を経験した者もいるという噂まで立ったのである。

しかし、このような村人の世間話や超常現象の噂に対し、「語り手」はただ、「私は分からない」（"I cannot tell"）を繰り返すばかりである。

XXⅡ

And some had sworn an oath that she
Should be to public justice brought;
And for the little infant's bones
With spades they would have sought.
But then the beauteous Hill of moss
Before their eyes began to stir;
And for full fifty yards around,
The grass it shook upon the ground;
But all do still aver
The little babe is buried there,
Beneath that Hill of moss so fair.

XXⅢ

I cannot tell how this may be:
But plain it is, the Thorn is bound
With heavy tufts of moss, that strive
To drag it to the ground.

And this I know, full many a time,
When she was on the mountain high,
By day, and in the silent night,
When all the stars shone clear and bright,
That I have heard her cry,
'Oh misery! oh misery!
Oh woe is me! oh misery!'

XXⅡ

それから、彼女が公の裁判に
引き出されるべきだと明言する者もいました。
また村人たちは、鋤を使って、
幼い子供の骨を探したことでしょう。
でも、たちまち苔の山は、彼らの目の前で、
動き始めたのでした。
それから、周囲丸々五十ヤードにわたり、
草が地面の上で揺れたのです。
しかしそれでも、全ての人は今もその幼い赤子は
そこに埋められ横たわっていると確言しています。
そんなに美しい、あの苔の山の下に。

XXⅢ

こんなことがありうるかは私にはわかりません。
しかし、山査子を地面へと一生懸命引っ張る、
苔の重い房に山査子が縛られていることは明らかです。
それにこのことだけは確かです。昼でも、
また、全ての星が冴えて、明るく輝く、静かな夜でも、
彼女が高い山の上にいる時は、何度も何度も、
「ああ悲しい、ああ悲しい、
ああ辛い、ああ悲しい」と彼女が泣くのを、
今まで私が聞いてきたということは。

詩「山査子」を読む読者はこの詩が何ひとつ確かな物語を伝えてくれないことに戸惑いを感ぜざるをえないだろう。子供は生まれたのか、死んだとしても、なぜ。死産だったか、それとも母マーサの手によって命を奪われたのか。なぜ、マーサは星降る夜も、嵐の夜も「山査子の木」の根元へ出かけ、悲しみに暮れ、泣くのか。様々に流布する村人の噂に翻弄されながらも、語り手が唯一確信できる事実は、彼自身がその目でマーサが泣く場面に遭遇し、実際に彼女の顔を見たということである。彼女の悲しみの号泣だけは、疑念を抱くことの出来ない事実である。

XVIII

'Twas mist and rain, and storm and rain,
No screen, no fence could I discover,
And then the wind! in faith, it was
A wind full ten times over.
I looked around, I thought I saw
A jutting crag, and off I ran,
Head-foremost, through the driving rain,
The shelter of the crag to gain,
And, as I am a man,
Instead of jutting crag, I found
A Woman seated on the ground.

XIX

I did not speak — I saw her face,
In truth it was enough for me;
I turned about and heard her cry,
'Oh misery! oh misery!'
And there she sits, until the moon
Through half the clear blue sky will go;
And, when the little breezes make
The waters of the Pond to shake,

As all the country know,
She shudders, and you hear her cry,
'Oh misery! oh misery!'

XVⅢ

霧と雨、また、嵐と雨の天気でした。
それらを遮るものも、垣根も見つかりませんでした。
それから風が吹き、実際それは、
優に十倍の強さの風でした。
私は見回し、突き出た岩山を目にしたと思いました。
それから、真逆様に、吹付ける雨をぬって、
岩山に避難場所を得ようと走って行きました。
それから、私が人間であるように間違いなく、
突き出た岩山のかわりに、一人の女が
地面に座っているのを見たのです。

XIX

私は話しかけはせず、私はその顔を見たのです。
実際それで私には十分でした。
私が踵を返すと、「ああ悲しい、ああ悲しい」、
と彼女が泣くのが聞こえました。
それからその場所に彼女は、澄みわたる
青い空の半分を月が過ぎるまで、座っているのです。
それから、国中の人が知っているように、
微風が立って、水溜の水を揺する時に、
彼女は身震いをするのです。そうして、
「ああ悲しい、ああ悲しい」、
と彼女が泣くのが聞こえるのです。

語り手は、マーサの奇行に関し確信への唯一の証拠を得る。つまり、彼は、噂とは無関係に、「彼女の顔を見たのであった」（“I saw her face”）。彼はさらに

続けて言う、「実際それだけで自分には十分だった」(“In truth it was enough for me”)。ここには詩人ワーズワスの認識論、延いては彼の想像力に関する思想が現われていると考えられる。

ワーズワスは、偉大な自然に囲まれていたため自己を喪失しかけ、壁にすがりついた、という幼い頃の思い出を残している。詩人のこのような性格は彼の想像力にまで強く影響力を及ぼしてたといってよかろう。つまり、彼の想像力においては、「自己」に対する外の世界である「自然」は彼の自己存在を危なくするものであり、コールリッジの想像力説に見るように、「自然」は全て内的世界、「自己」の投影ではないのである。ワーズワスの想像力の特徴は「目や耳」の世界が「自己」と交わりつつも、「自己」の外に存在することである。詩人のこのような思想は、彼の『序曲』(*The Prelude*) におけるアルプス越えの場面において、黙示録的な瞬間が描かれずに終わっているという事実にも見出されるといえる。ワーズワスの想像力においては、あくまでも経験論が残るのである。

ワーズワスの詩「山査子」は彼が『叙情民謡詩集』への「序文」で主張した、新しい詩の試みの条件を満たしている。しかしながら、「山査子」の詩は、田舎人の生活に見る、「自然」を前にして「自然」の助けによりひたすら生き抜こうとする人物と、その姿が教える「様々な倫理」を表す以上に、彼の想像力に関して多くを語っていると考えられる。つまりこの詩は彼の詩の創造過程についての詩であると理解することが可能となる。

詩「山査子」は、噂や超自然という非現実の世界の中に埋没せず、自分の「目や耳」を経験野の基礎に置き、その上に自己の詩的想像力世界を構築しようとする、彼の詩論が表明されたものである。詩「山査子」は、約一年前にコールリッジが「クビライ・カン」で試みたように、「詩についての詩」、「メタ・ポエトリー」の一つと考えることが可能である。

参考文献：

Torby R.Benis, "Martha Ray's face: life during wartime in 'Lyrical Ballads'", *LookSmart's Find Articles* (Spring, 1977)

A.S.Gerard, "Of Trees and Men: the Unity of Wordsworth's *Thorn*", *Essays in Criticism,* XIV, pp.237-55.

Michael Mason (ed.), *Lyrical Ballads* (London: Longman, 1992, 1996)
テキストの引用はこの版による。

Paul D.Sheats, *The Making of Wordsworth's Poetry, 1785-1798* (Cambridge, MA: Harvard U.P., 1973)

James Treadwell, "Innovation and Strangeness; or, Dialogue and Monologue in the 1798 *Lyrical Ballads*", *Romanticism On the Net 9* (February 1998)